

LET 関東支部だより

外国語教育メディア学会

第 39 号

2007年3月発行

英語教育への提言

- 英語教育への過大な期待 -

外国語教育メディア学会 元関東支部長 佐藤 寧 (明治学院大学)

今日、一般の人たちは英語教育に関して過大な期待をしていないだろうか。英語にかぎらずどの外国語でもいいが、その母語話者と日常会話がスムーズに出来るようになるためには、一体どれくらいの時間とエネルギーが必要であろうか。おそらくこの問いに対する答えは、学習者のおかれた学習環境・意欲・必要性によって大きく左右されるものと思われる。ゆえに、たとえ模範的な答えがあったとしてもそれが個人的にはさほど有益とは思えない。たとえば、真のリスニング力をつけるためには目標言語を少なくとも 2,000 時間聞くこと、と言われても学習環境などの諸要因との相関関係がはっきりしない。さらに、問題をより複雑にするのは、かりに 2,000 時間外国語を聞いたとしても、その発音・文法・語彙に関する個人差をどのように考えるべきか判然としなない。

英語にかぎって言えば、たとえ中・高・大と 10 年間学習しようとも、日常それを使用する環境もなければ、なにがなんでも習得しようという意欲もなく、英語を使って仕事(あるいは生活)をする必要もないというような場合に、学習者全員に英語をペラペラ話す能力など期待する方が間違っているのである。第一に、私が知っている英語の達人たちは、英語が好きで学習意欲が高く、学校以外での学習に余念がなかった人たちである。彼らはどんな状況にあっても自分なりの学習方法を見つけて努力するから、放っておいても出来るようになった。第二に、英語ができるようにならなかったか、あるいは英語で苦労した親が自分の子どもと学校に過大に期待をするのは、上記のような事情が理解できないため、ナイーブすぎる。つまり、たかだか週に 3,4 時間程度の学習ではとうてい英語を流暢に話すことなど無理なのである。

とは言え、英語を媒体として世界を駆け巡る情報の速度と量を私たちは看過することができない。つまり、過去に誰も経験したことのないような高度な情報化社会になり、またその恩恵を享受する者として、外国語とりわけ英語の重要性を軽視することはできない。さらに、世界中の非英語圏の国では、ほぼ例外なく英語を第一位の外国語科目として教えている。これは、とくに第二次世界大戦以降、アメリカがその圧倒的な政治・経済・軍事力を誇示し、科学の分野でも世界の頂点に君臨してきたことと無縁ではない。したがって、好むと好まざるとに関わりなく英語が世界の共通語になっているのである。

このような時代にあって、どのような(中学・高校)英語教育を提供すべきか、この国の将来とも関係する極めて重要な課題である。私は次の点に関する取り組みが重要であると考えます。第一に、学校では英語の基礎基本(発音、文法、語彙)をしっかり教える。同時に、海外でサバイバルするために必要な会話力を身につけさせる。第二に、英語は世界の人たちと共存するために必要であることを教える。また、世界の国や文化に関心を抱くように指導する。第三に、言葉(英語など)を用いたコミュニケーション能力の向上を目指す。第四に、携帯電話を含め、情報・通信機器などを学習に積極的に活用する。本学会は、とくに四番目に関して、研究・開発すべき大きな役割を期待されている。

スタイルシートで敷居を低くする

石川 達朗 (*Language Education and Technology* 元編集委員長)

スタイルシートを提示することで敷居を低くすることである。通信教育学部の学徒にとって学科最終試験の敷居は高い。そこで、シラバスに評価基準を示し、課題の提示とともに学科最終試験(exit test)の style sheet を示すことになる。これで学徒は無駄な心配もなく学習の目標を設定し、学習計画を立てることが容易となる。

LET の学会機関紙 *Language Education and Technology* の style sheet は APA の style sheet に準拠している。この APA の style sheet には文法の項目もある。AP や UP などの style sheet にとって大切なのは語彙であろう。

各大学が入試の style sheet を提示することを提案したい。形式や語彙や文法項目等を示す用意をする作業は self study にも F D にもなる。各大学は入試の style sheet を提示することで入試の敷居を低くすることができ、このことによって入試志願者の増加を図ることができる。この入試 style sheet は入試問題説明会でも活用することができるし、web 公開も可能となる。また、この入試 style sheet に合わせて過去問を集め情報を蓄積して活用することも考えられるようになるでしょう。各大学で入試の style sheet を作成する過程で話題になったことを L E T の研究会で発表していただけると、高校の先生も一緒に global standard を目指す英語の教育について議論することができそうです。

温泉で地酒を交わしながら情報や意見を交換することも、学会の敷居を低くする style sheet にならないでしょうか。ケンブリッジ大学英語検定試験である KET、PET、FCE なども、ケンブリッジ大学英語教授能力検定試験である TKT も、TOEFL や、TOEIC や、TOEIC Bridge なども sample test に加えて style sheet を提示して欲しい。このことは生涯学習も含めて students' sustainable motivation in learning English for special purposes を考える上で重要である。新しい日本語検定試験でも是非 style sheet を提示していただきたいところです。

LET 関東支部第 117 回研究大会を終えて

飯野 厚(清泉女学院短期大学部)

去る 2006 年 10 月 28 日(土)、長野市の本学において LET 関東支部第 117 回研究大会が開催された。本大会のテーマは「小学校からの英語教育 - メディアを活用した授業」であった。穏やかな天候の下、69 名の参加者を得た。開会に際し、LET 関東支部長の見上晃先生より、ご挨拶を頂いた。続いて本学学長代理として諏訪部真教授より歓迎の言葉が述べられた。午前中は実践報告があり、3 本の発表が 30 分ずつ順に行われた。まず 1 本目は田中幸子先生(慶応義塾大学大学院生)による「日本人児童のための外国語学習ソフトの開発と実践評価 - 「総合の学習」内での ICT と外国語学習のコラボレーション - 」であった。独自に開発されたソフトの活用状況が報告され独創的なアイデアと実践力が示された。2 本目は飛田ルミ先生(足利工業大学)と杉本隆之先生(国際医療福祉大学)による「小学校英語教育におけるメディアを利用した授業実践報告」であった。メディアの活用状況が VTR により鮮明に伝えられ、インパクトのあるご発表で、ICT 技術が児童英語教育にも充分取り入れられることが示された。3 本目は僭越ながら自分から「Moodle によるテキストの音読映像の活用」と称して発表させて頂いた。最近多用されているコースマネジメントシステム(CMS)の利用初心者として、映像教材の提示と学生音声の提出の実例をお示しした。

昼食は、ピュフェ形式のランチパーティを行った。長野らしい食べ物ということで山菜そばなどを堪能して頂いた。企業展示も兼ねた会場ということもあり、賛助会員も含め参加者間で親睦を図った。午後は、本学教授である渡邊時夫先生より「小学校英語の必修化 - 期待される英語教育への影響 - 」と題して基調講演を頂いた。英語導入に向けての理論的な根拠や、具体的な事例を VTR でされ、参加者全員が小学校英語教育に関わる状況を把握する好機となった。引き続き大会テーマに沿った授業研究とシンポジウムのトラックと、それに並行する形でメディア活用のためのワークショップ 2 本も提供された。授業研究では鶴田恵市先生(長野県小布施町立栗が丘小学校)による「メディアを活用した小学校英語教育」。地元の実際の現場での英語教育の状況とコンピュータがどのように導入されているか、事例が示された。小学生の生き生きと学ぶ姿が現場教師の声とともに伝えられた。シンポジウムは、「小学校の英語コミュニケーション活動と評価を支援する教育システムの提案 - 教師とメディアによるチーム・ティーチング - 」のテーマで、コーディネータ・パネリストに椎名紀久子先生(千葉大学)、パネリストに吉成雄一郎先生(東京電機大学)、十川幸博(千葉県成田市立平成小学校校長)、楊 昉(中国・湖南大学)をお迎えし、多様な論点の論示や活発な討議が行われた。

ワークショップは神田明延先生(首都大学東京)による「授業で Google を使ってできること」と、下島義容先生(聖パウロ学園高等学校)による「Point を利用した教材作成」をご指導頂いた。両氏とも、大変具体的かつ明解に手順を示して頂いたので、参加者からも、すぐに現場で試してみたいとの声が聞かれた。

大変密度の濃い内容を凝集した 1 日となった。地元参加者が少なかったのは会場担当者である私の努力不足であるが、関東近郊はもとより新潟・山形など遠方からの参加もあり嬉しかった。最後の閉会行事において、副支部長の前田道代先生(神奈川県立外語短期大学)からご挨拶を頂き、一日の総括を述べていただいた。

今大会実施にあたり、不慣れな自分を助けるべく、関東支部実行に関わる先生方には前日より長野入りして頂き、会場設営等ご尽力頂いた。また、当日も受付・運営に関わる先生方の手際の良さに大変助けられた。LET が組織として円滑に運営されていることを肌で感じる事ができた。また、たった 1 日の大会であったが、多くの人に出会い、研究課題への新たな方向性を見いだすきっかけとなった。多くの参加者においても実り多い大会であったと思われることを期待している。

LET 関東支部第 117 回(2006 年度)研究大会報告

川邊 孝(東京電機大学)

昨年 10 月 28 日に、清泉女学院大学・清泉女学院短期大学(長野県長野市)で関東支部第 117 回研究大会が開催された。秋季研究大会としては、2003 年 11 月 8 日に小樽商科大学(北海道小樽市)で開催されて以来、3 年振りのことである。

前回の研究大会についての記憶は、3 年も経つとかなり薄れて来てしまったが、さすが北海道だけあり、秋季研究大会と言うよりはむしろ冬季研究大会と言った方が良いような寒さだったことだけは今でも鮮明に覚えている。まだ 11 月初旬だからとタカをくくって、コートを持って行かなかったことを大いに後悔したものである。

今回は、秋季研究大会と呼ぶのに相応しい秋晴れに恵まれた。信州での爽やかな秋の一日を、室内ではなく戸外で過ごしたいと思った参加者も多かったことだろう。キャンパスからは信州の山々が一望でき、このような素晴らしい環境の中でキャンパスライフを送ることができる学生達、教育・研究に従事できる先生方が羨ましく思われた。

午前中に開会行事と実践報告が行われたが、日帰りの参加者が多かったのか、開会行事の会場が閑散としていたのは残念だった。土曜日の朝早くから来ていただいている会場校の先生方には、申し訳ない限りである。今回、新たな試みとして、懇親会を閉会行事の後ではなく、ランチタイムに開催した。帰りの時間を気にしないで済むので、より多くの人に参加できると考えたからである。また、学会からの補助により参加費を 1000 円に抑え、気軽に参加してもらえるようにした。懇親会と賛助会員の展示を同一会場で行うことを心配する声も大会前にはあったが、参加者には中々好評だったようである。アットホームな雰囲気の中で、名物の信州そばを食べながら和やかに参加者同士が談笑している姿が印象的であった。

ランチパーティーの楽しい一時はあっという間に過ぎ、午後は最初に、渡邊時夫先生(清泉女学院大学)に、「小学校英語の必修化 - 期待される英語教育への影響 - 」というタイトルでご講演いただいた。さすがは LET の会員、昼食後はとかく眠くなるものだが、皆熱心に聞き入っているようである。小学校における英語教育に関しては門外漢の私にも分かり易く、また示唆に富んだ内容で、いろいろ考えさせられる。引き続き、授業研究・シンポジウムとワークショップ 1・2 を平行して行ったので、どちらに参加するか迷われた方もいたかもしれないが、両方とも充実した内容で、得る所が多かったのではないだろうか。閉会式の会場は朝と同じく閑散としていたが、懇親会が控えている訳でもないのに、自分も大会の企画を担当していなかったら最後までいたかどうか自信が持てない。

今から 5 年後、10 年後に振り返った時、どのような記憶が残っているのだろうか。会場校の先生方やアルバイトの学生達を始め大会準備・運営でお世話になった方達、自然に恵まれた美しいキャンパスはきっと忘れることがないだろう。つかの間でも慌しい日常生活を離れ、発表者から刺激を受けたり参加者と懇親を深めたりするのはやはり良いものだな、などと考えていると、間もなく新幹線は上野駅に着いた。もう少し大会の余韻に浸っていたかった気がするが。

関東支部第117回研究大会

「小学校からの英語教育 メディアを活用した授業」

岡澤 永一(暁星小学校)

秋風心地よい10月28日に、長野県長野市の清泉女学院大学・清泉女学院短期大学で、関東支部第117回研究大会が開催されました。今回は、「小学校からの英語教育 メディアを活用した授業」という好時期のテーマのもと、50名ほどの参加で会が進行しました。

開会行事では、LET 関東支部長の見上 晃先生(拓殖大学)と、会場校から、諏訪部 真先生(清泉女学院短期大学学長代理)の、お二人にご挨拶いただきました。その後、実践報告が午前中に三組ありました。今回は、一日のみの開催ということで、昼食をランチパーティーとし、各協賛企業の展示と紹介をその場で行いました。協賛企業の方々からは、参加者の多数が集まるパーティーで、商品の紹介を各社1分ずつ行うという新しい試みに、満足する声が多く寄せられました。また、参加者からも、商品の概要がわかりやすく、展示を回る際にも役立った、とご好評をいただきました。

午後は、小学校英語教育学会(JES)の現会長である渡邊 時夫先生(清泉女学院大学学長代理)より、「小学校英語の必修化—期待される英語教育への影響—」として、行政や小学校の動きを交えた包括的な内容の講演をいただきました。その後、具体的な英語活動の実践者として、鶴田 恵市先生(長野県上高井郡小布施町立栗ガ丘小学校)が壇上に立たれました。鶴田先生は、現勤務校の「総合的な時間」の中で、積極的に英語活動を担当していらっしゃいます。この日は、「読まず、書かず、訳さず」を指導の基本とした、授業構成や教具についての説明と、スマートボードという電子黒板を用いた活動例を紹介してくださいました。授業の基本は、児童の興味に密着した題材選びや、ねらいの焦点化などですが、スマートボードはそれらを補助、発展させられるメディア教具であるということが示されました。

次の、「小学校の英語コミュニケーション活動と評価を支援する教育システムの提案—教師とメディアによるティーム・ティーチング—」という題目のシンポジウムでは、椎名 紀久子先生(千葉大学)の司会により、パネリストの吉成 雄一郎先生(東京電機大学)、十川 幸博先生(千葉県成田市立平成小学校校長)、楊 昉先生(中国・湖南大学)が、それぞれの現状を踏まえた小学校英語教育のあるべき姿を発表され、その実現のための課題について意見を交換されました。

また、シンポジウムと同時進行で、ワークショップが開かれました。神田 明延先生(首都大学東京)には、Googleの検索機能だけでなく、航空画像や辞書機能を積極的に活用する授業法を、また、下島 義容先生(聖パウロ学園高等学校)には、Power Pointを使ったフラッシュ教材作成の具体的な方法などを、それぞれご説明いただきました。

シンポジウム、ワークショップ終了後、前田 道代先生(神奈川県立外語短期大学)より閉会のご挨拶をいただき、7時間にわたる、充実した一日に幕が下ろされました。

小学校の英語教育がますます拡大しようとしている今、教師の指導や児童の学習にメディアがどう係わっていけるのか、その可能性の模索は始まったばかりです。今大会が、その序章として、小学校英語の経過報告から最先端の機器を用いた授業の紹介、また、将来を見据えた提案まで網羅できたことは大変有意義であったと感じます。

最後に、この場をお借りして、今大会の開催にあたり、多大なご協力をいただいた清泉女学院大学・清泉女学院短期大学の関係者の皆様、長野県教育委員会、長野県内の公立小学校に厚く御礼申し上げます。

パラフレーズを活用したリーディング指導

久保田 章(筑波大学)

リーディング指導の一般的な課題に加え、筑波大学では、一般英語（1年生対象）と専門英語（2年生以上対象）の連携、「書くこと」の指導（習熟度別のB、Cクラスではライティングの授業がない）というカリキュラムの課題についても考慮する必要性がありました。そこで、一般英語の「英語（読むこと中心）」の理工系Bクラス（約40名）の授業展開について考えた結果、パラフレーズ（書き換え、以下PPと記載）の活用を試みることにしました。「読むこと」の授業に「書くこと」を組み込む意義は、授業連携の点から、将来英語でレポートや論文を書く時に役立つというだけでなく、英文和訳と比べ、PPでは、もっと正確な英語の読み取りが必要になると考えられるからです。

1、2学期は別の読解作業を行い、PPには3学期の10コマをあてました。元の英文は、“Do We Need a New National Anthem?”という、アメリカ国歌に関する短めのエッセイで、言語的な観点に加え、背景知識が必要と思われる教材を選びました。授業にはCALL教室を使用しました。

初回は、第一パラグラフの書き換えです。和訳だけで満足しがちな学生の意識を変えることがねらいです。例えば、エッセイ中の“Musically speaking,....”を和訳させると、ほぼ全員が「音楽的に言えば」と訳します。「音楽的に言えば」の意味を問うても怪訝な顔をされるだけですが、学生自身が、この部分を別の英語で表現しようとする、あえて指摘されなくても、その本質的な意味を求めざるを得ません。結局は和訳ではないかと思われるかもしれませんが、PPの前提条件として、「理解したつもり」からの脱却を迫ることになります。

続く3回の授業では、PPの本質の理解と、前回の自分の作業結果の点検が目標です。その際、Purdue University Online Writing Lab (<http://owl.english.purdue.edu>)というサイトを利用しました。このサイトでは、PPの定義や意義だけでなく、練習問題まで提供されていて、参考になります。サイトを閲覧すると、実は読むことがPPの根本にあると理解できます。また、初回の自分の書き換えとPPの見本を比較することで、単語レベルではなく、元の英語の意味を「自分の言葉」で表現し直すことがポイントだと気づきます。

この後、再度第一パラグラフからPPにチャレンジします。CALL教室なので、学生の作業をモニターし、工夫している学生の文章を提示して、他の学生に刺激を与えたり、時々ペアやグループで意見を交換して共同作業で仕上げることも認めました。どうしても難しい箇所があれば、机間巡視の際に質問を受けました。必要な背景知識については、学生が自分でウェブ上の情報を探することを奨励しますが、やはりPPの方に集中しがちなので、こちらが全体の作業状況に応じて、必要な情報を提供していきました。また、各自の状況に応じて自宅学習を行いました。

評価は、どの程度元の英文の姿が見えなくなったかを基準としましたが、学生によってPPの程度は様々でした。しかし、授業後の感想では、これほど同じ英語を読み返したことはなかったとか、英文和訳よりはるかに深い理解が必要で難しかったという内容の意見が多く、当初の目的はかなりの程度達成できたのではないかと考えています。

デジタルとアナログの併用による CAI

磯 達夫 (麗澤大学 外国語学部)

自習用の CAI 教材を正規授業で利用する際には多少の問題が生じます。学習者の手元に学習の記録が残りづらく、学習者と教員との関係が希薄化する事もあります。本稿では、CAI 教材を正規授業の教材として利用している麗澤大学外国語学部の取り組みをご紹介します。

まず、麗澤大学外国語学部では(株)アルクの『NetAcademy』初級・中級コースとスタンダードコースを正規授業科目の教材として利用しています。この背景には、自習利用のみに頼ることの難しさ(望月・片桐, 2003)があります。週 1 回 90 分の授業を 20 分の「復習テスト」と 70 分の「学習」に分割し、さらに授業外で 1 時間の自習を課しています。その週の学習内容は次週の授業開始時にテストされ、毎回のテストの点数の合計が最終成績となります。

このような授業において、問題が 2 つ生じます。1 つは、学習内容・記録へのアクセスの問題です。自習利用とは異なり、テストのために学習者は復習を余儀なくされます。しかしコンピュータが利用できない時には復習することは不可能です。また、自分が何を学習したのかが不透明で、手元に何も残らないのが不安だという学習者の声も聞かれます。

もう 1 つの問題は、学生の実態を見えづらくするコンピュータの存在です。本授業の主体はあくまで学習者とコンピュータです。教員は授業時間内に机間巡視をして学生の質問に対応しますが、実際に質問を受けることは多くありません。学習者はコンピュータ上で解説を見て安心します。理解度を過大評価することも多いでしょう。しかし、教員はコンピュータという壁に阻まれ、テストをするまで学習者がどれほどの理解度を示しているのかが見えません。各問題に対する学習者の反応は履歴で確認できますが、それがその課全体の理解度を示しているかどうかはわかりません。

これらの問題を是正すべく、2006 年度第 2 学期より、ノートの提出を義務化しました。このノートには「自分で意味・用法等を調べた語彙等の覚えるべき事」「間違えた問題」「質問したい内容」の 3 つを主な内容として記入することにしてあります。授業中にノートを取りながら NetAcademy での学習を進め、授業終了時に提出します。教員はノートの内容をもとに次週のテスト問題を吟味し、質問に答えて返却します。

これにより、学生がどの問題を間違えたかだけでなく、どの様な点を難しいと感じているのかも見えるようになりまし、質問の量も質も格段に上がりました。学生もテスト前の復習の第 1 段階としてこのノートを利用しているそうです。その後、再度コンピュータ上でレッスンに取り組むことにより、弱点を克服してゆきます。

ノートの導入により、学習者も手元に残る学習の記録により安心感を得ている様に思われますし、教員の側も学習者との繋がりが密になり、優れた教材をさらに活かすような利用の仕方ができている様に思われます。しかしながら、この効果は数量的に裏付けられたものではありません。今後は CAI におけるデジタルとアナログの融合の効果測定という課題に取り組む必要があります。

参考文献

望月正道・片桐一彦. (2003). 「ネットアカデミー利用実態報告：平成 14 年 9 月ー平成 15 年 1 月」『麗澤大学紀要』, 76, 175-185.

習熟度別少人数クラスによる「英語」の授業

長谷川 修治（千葉県立茂原高等学校）

1. はじめに

現在、私の勤務している高校は、創立百有余年の歴史を持つ女子高が3年前から男女共学となり、文武両道の進学校として生きるための模索を続けています。特に大学進学者数の実績を上げるため、受験の主要科目となる英語の学力を向上させることが課題となっています。しかし、近年、「特色化入試」と称される入試形態により、中学校の調査書（絶対評価）と小論文および面接だけで入学してくる生徒が定員240人の半数を占め、実際の学力を伴わない生徒も見受けられます。また、英・数・国・社・理の学力試験と面接からなる「従来型入試」による入学者の中にも、英語を苦手とする生徒が少なくありません。このような新入生の学力差を考慮した上で、英語の学力向上を図るため、昨年4月より「英語」の授業3単位を、2クラス3分割の「習熟度別少人数クラス」による授業展開としました。

2. クラス分け

新年度の入学許可候補者に対し、3月中旬に入学説明会が行なわれます。その際に、新1年生候補全員に対し、英・数・国の基礎的な実力判定テストを実施します。その結果を基に、選抜組1クラスが作られ、残りは均等に5クラスに振り分けられます。合計6クラスあるため、「英語」の授業は、この実力判定テストの英語の点数を基にして、2クラスずつをそれぞれ3分割し、A（上位レベル）1クラス、B（中・下位レベル）2クラスにします。ただし、選抜組の入る組み合わせは、A2クラス、B1クラスとしました。結果的に、2クラス80人が3分割された、1クラス27人程度の同時展開授業となります。また、各学期（3学期制）の定期試験と実力テスト（外部模試）の英語の成績により、2学期と3学期にはクラスの入れ換えが行われます。これは、予め生徒にも伝えておきます。

3. 授業方法

授業は3人の教師がAクラスとBクラスをどちらも持つように担当します。そして、各学期ごとに教科書のLessonをどこまで進めるかを確認した後、授業方法は各担当者の裁量にまかされます。基本的に、Aクラスは進度が速く応用的な内容も含まれるのに対し、Bクラスは比較的ゆっくりと基礎的なことに重点を置いて教える形となります。「英語」は、単位数が3単位と少なくしてそれほど教科書から離れたことができるわけではないので、各学期の中間・期末試験（3学期は期末試験のみ）の範囲と問題はA・Bクラス共通です。各定期試験の前には、学年全体で、試験範囲の教科書該当部分の単語・熟語テストが行なわれます。また、語彙力を増強するため、大学受験用の単語・熟語集を全員に持たせ、2週間に1度の割合で、朝のホームルームの時間に5分間の小テストを実施しています。

4. 生徒の反応と評価

この習熟度別少人数クラスによる授業展開を生徒がどのように捉え評価するかを、各学期の終りにアンケート調査を行い、反省と改善の資料としています。3学期は現時点ではまだ集計が終わっていないので、1・2学期の調査結果から、生徒の反応と評価を報告します。結果は、AクラスとBクラスともに、「非常に役立っている」「わりあい役立っている」と答えている生徒の合計が、1学期では50%弱、2学期では50%強になっています。一方で、「あまり役立っていない」「全く役立っていない」と答えている生徒の合計は、1・2学期ともに、Aクラスで1%程度、Bクラスで3%程度です。特に、2学期に行なった調査で、4月からの意識の変化については、A・Bクラスともに半数以上の生徒が、「英語を勉強したくなった」もしくは「英語が好きになった」と答えています。

5. 今後に向けて

習熟度別少人数クラスは、生徒の意識面ではプラス効果があるようですが、実際の学力向上にどの程度寄与したかを計測しなければなりません。また、この結果を今後どう生かして行くかが課題です。

教材教授法研究部会

久保田 章（筑波大学）

今年度は大きな活動方針を2つ設定しました。ひとつは、一昨年、昨年と2年間に亘って部会で研究してきた「英語教育における映画英語字幕の効果的利用」というテーマを引き続き念頭におき、そのテーマを理論的、実践的観点からさらに掘り下げることで、もうひとつは、学会の性質上、英語教育に限定せず、もっと他の外国語教育における教材や教授法にも広く関心を向けようということでした。必要に応じて情報交換しながら、会員がそれぞれの関心に基づいてというスタイルで研究を実施してきました。以下は、会員の活動の一部を紹介するものです。

映画の英語字幕データの利用については、まず基礎研究の一環として、映画の台詞の言語情報データベースの一層の充実を図りました。さらに、語彙や文法、言語発達等の観点から、映画字幕の言語データと the British National Corpus や the Bank of English のような大規模コーパスの言語データとの比較を行ったり、日本の中学校の検定教科書との比較を行ったりして、映画英語の特徴を量的、質的に把握しようと試みました。その成果の一部を論文として発表しました。あるいは、すでに作成した字幕データベースを利用して、大学生向けのテキスト教材の作成に着手しました。また、現在児童英語教員のための単語集を執筆中の会員もいます。

他の外国語教育については、ポルトガル語のコミュニケーションに有用な語彙やフレーズの収集と分析を行い、その成果を出版しました。同様に、ポルトガル語の学習のためのドリル教材を開発しています。

音声映像研究部会

佐藤 努（明治学院大学）

2006年度は研究報告と部会研究会を行いました。

まず、研究報告ですが、第116回関東支部研究大会（6月3日、於 東洋大学白山校舎）にて、「強度表示を取り入れた発音評定ソフトの開発に向けて」と題するものでした。LL用に開発されたスピーチ・トレーナーから現在のCall対応ソフトまでの問題点、とくに超分節素のうちの強度の扱いがいまだに不十分である点を指摘しました。否定語を必要以上に大きく発音したり、旧情報にあたる語を適切に弱められない例を提示し、このような日本人学習者の特徴を含んだデータを蓄積し、英語話者のパターンとの比較を可能にするようなソフト開発の提案を試みました。

部会研究会は通算6回目となり、講師として 鈴木政浩先生（西武文理大学）をお招きし、「英語教育における音読指導の効果：音読能力測定ソフトの活用と実践例」をテーマに貴重なお話を伺いました（7月29日、於 明治学院大学白金校舎）。まず、(株)ライトハウスにもご協力いただき、学習者がヘッドセットのマイクを通じてテキストを読み上げると、その音声を取り込み、発音の程度をグラフとして表示するソフトの紹介がありました。続いて鈴木先生より、洋画や洋楽を教材にした活用法について、ご自身の授業からの豊富な実践例の提示、ならびに詳しい解説がありました。

学習環境研究部会

滝本晴男（大妻女子大学）

石川洋一（日米会話学院）

1)活動内容

学習環境研究部会では、2006年11月から2007年3月にかけて、学会賛助会員が制作・販売しているCALL、LL教育システムに関する意見交換会を6回開催した。参加者は予想したほどではなかったが、制作者が授業をどのように捉え、何をどのように考えてシステムを設計したのかを知る良い機会になり、また、担当していただいた賛助会員にとっては、実際の授業ではどのような機能が、どのような操作性とともに必要とされるかについての多様な現場の声を聞く格好の場となり、密度の濃い、内容の充実した意見交換を行うことができたと思われる。

2)意見交換会の主旨について

CALL教室がLL教室にとって代わろうとしている昨今、CALLシステムだからこそ可能となる新たな機能が数多くある反面、導入経費の高騰や、今までLLで行えた学習活動が実践できないなどの問題点があり、利用者側から少なからず不満の声が上がっている現状にある。また、そのような状況から、従来とは異なった設計思想によるLLシステムが開発されており、研究会や教育現場などでしばしば聞かれる、

CALLシステムとはどんな施設・設備を意味するのか知りたい。

これからCALLシステムの導入を考えているがどのようなポイントに注意して各社のシステムを比較したら良いのかよくわからない。

すでに導入はしてみたものの、使い方、操作方法来にまだ馴染んでいない。

CALLシステムではどのような授業ができるのか知りたい。

といった要望、疑問に応えるため、このような意見交換会を企画・実施した。

3)取り上げた具体的なテーマについて

- a)CALL教室、LL教室の設計思想と、メーカーが考えるCALL教室、LL教室の定義、想定する授業
- b)CALL教室、LL教室でできること（特にAll Call, Intercom, Monitor, Model, Pair, 教材送出, 家庭学習との連携などに関連して）
- c)CALL教室、LL教室で行いたい教授/学習活動～利用者のニーズから～
- d)デジタル化の功罪～教材送出系、コミュニケーション系の使い分け？～
- e)使いやすさを目指したコマンド配列
- f)その他

4)日程、対象システム、参加者などについて

	日程	対象システム	製作企業	会場	参加者		特記事項
					会員	非会員	
第1回	06.11.18.	Listening Station	(株)アンペール	大妻女子大学	13	3	
2	06.12.2.	L3 Stage EZ	松下電器産業(株)	大妻女子大学	7	0	
3	07.1.13.	PC@LL	(株)内田洋行	大妻女子大学	9	0	
4	07.1.27.	CaLaboEX	(株)チエル	上智大学	15	1	上智大学、関東支部コンピュータ部会との共催
5	07.2.24.	smaLL	(株)バルデザイン	大妻女子大学	9	1	
6	07.3.17.	WeLL	日本ビクター(株)	大妻女子大学	8	0	

以上、詳細な報告はweb (http://www.bekkoame.ne.jp/~go0dv.f0ur/TEST/LL_meet.htm) を参照のこと。

早期外国語教育研究部会

久埜 百合（中部学院大学）

2006年度末に、或いは小学校の英語教育の形が整う方向で進むのかと思わせる専門部会の審議経過報告もあったが、その後伝わってくる状況は、大きく進捗しているとは思えない。しかし、小学校現場で実際に授業を作ろうとしている学級担任やサポートされる日本人・外国人講師は、さまざまな方法で情報を得ながら努力を重ねている。

現場を訪れて多くの実践に触れているが、小学校にIT機器が想像以上の勢いで導入されていることに目を開かされる。都内のある区では、全校に電子ボードを一台入れた。個人的に電子ボードを購入して学校に設置し授業に活用している先生の数も全国で2000人を超えたなどと知らされ、効果的に活用されている授業を参観することもある。

小学校英語の指導目標が明確になっていないこともあって、IT機器を使いこなすソフトの開発が遅れていることは否めない。私たちの部会でも、2月に電子ボード関係の研究会を開き、さらに教材政策の可能性を探ろうとしている。動き出したばかりであるが、来年度もこの方向で研究を続けて行こうと考えている。

本号に掲載されていない研究部会の報告は次号に載せる予定です。

編集後記

「支部だより39号」が発行の運びとなりました。
「猫の手も借りたい」ほどの多忙な年度末に、原稿をお寄せくださいました執筆者の方々に心から感謝申し上げます。

或る研究会でお会いした高校の先生が、「支部だよりの中に書かれていた授業実践が参考になり、自分の授業に取り入れました。」と話されていました。また、或る小学校の先生からは「小学校の先生の中には、英語の授業で悩んでいる人もかなりいるので、小学校の授業についての情報や実践例が欲しい。」との声がありました。支部だよりでの記事や、話題の取り上げ方もできるだけご要望にお応えしながら、新しい企画にも取り組んでいきたいと考えております。

今後とも更なるご協力をお願いいたします。

石丸 玲子 ishi-mr@nifty.com

英語の基礎基本をしっかりと身につけるためには、何と言っても練習が必要だと思います。ここ数年間、生徒達の家庭学習として「毎日ノート」を課しています。毎日、1ページになんでも自分で学習したいものをぎっしりと書く練習をしていくものです。単純な練習ですが、この単純作業をしっかりと行った生徒は伸びていきます。コンピュータのキーボードを叩くのと異なる自分の「手」で書く作業そのものが、一文字、一文字を指に覚えさせる魔術を持っているような気がするのです。

今年も高校一年生の担任となります。

アナログな作業で地道な努力ができる生徒を育てていきたいと思っています。

小林 順子 kobajun@tkc.att.ne.jp